

特集

「難病と闘う子どもたちとその家族に 心休まる豊かな時間を」

～奈良・東大寺での親子レスパイト・ケアの試み～

難病と闘い、重篤な障害を背負って生きる子どもやその家族は、24時間365日、常に命と向き合う戦場のような日々を送っています。このような子どもと家族が、日常とは違う場所で、生きる意味を再発見し、心休まる時間を過ごせるようにするための活動として「子どもホスピス」と呼ばれるものがあります。これは、1982年イギリスでシスター・フランシス・ドミニカさんによって開設された「ヘレン&ダグラスハウス」から始まりました。病気や障害のある子どもたちへのレスパイト・ケア（一時預かり、ショートステイ）、症状緩和、ターミナルケアや子どもと死別した家族のケアをアットホームな環境の中で提供しています。

現在、世界では100を超える場所で、こうした「子どもホスピス」が実践されています。日本には、まだありませんが、徐々に開設に向けての動きがみられます。今回は、そのうちの一つ、奈良・東大寺の宿坊を利用して行われた「親子レスパイト・ケア」を紹介します。

難病や重い障害とともに 生きる子どもが年々増加

近年、医療技術や医療機器の進歩により、ほとんどすべての病気から子どもの命を救うことができるようになりました。しかし、その一方で、完治の困難な難病、あるいは治療後の後遺症や先天性の障害などを抱えながら、在宅で暮らす子どもたちの数は、年々増加しています。このような子どもたちに求められるのは「病の完治」以上に、「限られた日々を豊かに生きること」、すなわちQOL(生活の質)の向上です。

医療行為の緊張やストレス が家族にのしかかる

子どものQOLは、生活環境に影響を受けやすく、とりわけ身近にいる家族のQOLによって大きく左右されます。しかし、難病や重い障害

児のいる家族には、たんの吸引、人工呼吸器の取り付け、胃ろう(わき腹からチューブを胃に入れ栄養を摂取する方法)など、子どもへの医療的なケアや介護が委ねられているため、24時間365日、気の休まることはありません。経済的負担のみならず、肉体的・精神的苦勞も多い家族のもとで暮らす子どもは、さらに大きなストレスを抱えてしまいます。

介護者の負担に 関心が向きがちで 子どものQOLが 忘れられがち

イギリスでは早くから、難病や重い障害のある子どもたちが、限られた命を豊かに生きるために「子ども専用のホスピス」がつくられています。ここでは、専門的な技術とサービスを結集したケアチームが、病気の子どものとその家族に対し、症状の緩和や死の看取りのケアを提供

しています。

その中の一つに「レスパイト・ケア」があります。レスパイトとは「立ち止まる、一時的休息」を意味し、レスパイト・ケアは、施設への短期入所や自宅への介護人派遣などで一時的にケアを代替し、介護者にリフレッシュを図ってもらう家族支援サービスです。

しかし、レスパイト・ケアは、介護する側の負担を軽減することが重視され、子どものQOLについては忘れられがちです。介護している家族は子どもを施設に預けることで安心することができますが、預けられた子どもは知らない人にケアされることが大きなストレスになることがあります。親子関係が濃密であればあるほど、その傾向が強いといえるでしょう。

非日常の空間で 共にいやすれる 親子レスパイト・ケア

そこで注目されているのが、「親子レスパイト・ケア」です。これは、親と子どもの両方に休息を与えるというだけでなく、これまでのレスパイト・ケアとは本質的な違いがあります。

従来のレスパイト・ケアは、既存の医療・福祉施設を活用し、子どもにはできるだけ「家に居る」ときのような環境が望ましいとされ、親は別の場所で一時的にストレス発散や生き抜きをする、すなわちマイナス要素の解消が目的です。しかし、「親子レスパイト・ケア」では、逆に日常とは異なる体験や活動を親子で一緒に行い「介護するもの」「介護されるもの」の関係から解放され、新しい人・コト・モノに出会ったり、親子でいることの喜びを再発見したりするなど、新たな価値観の創造を目指しています。



●奈良小児在宅医療支援ネットワークの取り組み

東大寺華厳寮での 親子レスパイト

奈良小児在宅医療支援ネットワークは、難病や障害のある子どもの在宅医療支援の推進を目的として結成され、奈良県内の小児在宅医療支援のための調査、市民への啓発活動、レスパイト・ケアの支援を行っています。レスパイト・ケアについては、東大寺の宿坊・華厳寮で、家族のためのレスパイトハウスの開設に向けて準備中です。

準備の一環として、昨年、「親子レスパイト・ケア」を試験的に実施しました。そこには、さまざまな専門家や市民、ボランティアが毎回40人ほど集まり意見交換をしながら、親子レスパイト・ケアの可能性や実行性を探りました。具体的には、7月に、難病の男性とその家族に初めての宿泊体験をしてもらい、11月には白血病で子どもを亡くした家族から「生前にしてあげたかったこと」などの意見を聴きました。

最後に一般市民公開シンポジウムを開き、小児がんと闘った人の10年の記録映画「風のかたち」を上映したほか、親子レスパイトハウス開設に向けての協力を呼び掛けました。

ここでは主に7月の宿泊体験について紹介します。



▲多くの医療器具やケアグッズが日常的に必要。1泊するための荷物リストはぎっしりA4で4枚。パッキングに2~3日かかったそう。

奈良のゆたかな歴史や 自然環境の中で

「親子レスパイト・ケア」の舞台は、奈良の代表的な歴史的遺産・東大寺の境内にある宿坊・華厳寮です。華厳寮は、8世紀、唐僧鑑真かんじんが日本に戒律を伝えるため来朝した際に設立した戒壇院戒壇堂のすぐそばに位置し、非常に静かな環境にあります。寮内には、大小の和室や洋室のほか、食堂や風呂なども整い、普段は研修などに利用されています。ただし、バリアフリーではありません。これについて同ネットワーク会長で東大寺福祉療育病院副院長とみわきよたかの富和清隆さんは、次のような考えを話してくれました。

「バリアはあっていいんです。親子で、仲間や地域でそれを共有すればいい。段差があれば、みんなでかついで登ればいいんです」。

難病児とその家族、そして思いを共有する研究者や福祉専門職、ボランティアらは、この華厳寮で宿泊(1泊)を体験します。

富和さんは、奈良という地域でケアが行われることについてこう話します。

「幼い頃にみた夕焼け空など、誰の心の中にも原風景があるでしょう。東大寺をはじめ千年の歴史が脈打つ奈良の地は、多くの日本人が共有する原風景に近いのではないのでしょうか。このような場所で、親子でいることの喜びを感じながら、ともに時を過ごすことは、日



▲東大寺戒壇堂のすぐそばにある華厳寮。普段は宿坊で研修などに利用されている

常に緊張を強いられている難病の子どもやその家族の心身にゆとりを与えてくれるはずです」。

スタッフの思いを結集し、 “特別な時間”をつくる

宿泊体験に入る前に、協力者である当事者とその家族宅を訪問し、在宅医療の実際を知り、宿泊先でのケア内容や持参する医療器具などのリストをつくりました。

「持参する物品リストは、A4で4枚もありました。どれ一つ欠くことのできないものです。親御さんはパッキングするのに2~3日かかったとおっしゃっていました」と富和さん。

当日のスタッフは、担当ヘルパー、元支援学校担当教諭、主治医、医大小児看護教室教員、医大看護学生、地域支援室スタッフ、東大寺華厳寮職員、ボランティアです。

協力した当事者とその家族が豊かな時間を過ごせるように、スタッフは当事者に思いをよせながら、さまざまな気配りをしました。

お茶会の開催は、ふだんから茶道に親しんでいる富和さんのアイデアです。

「何をしてほしいですかとお尋ねすると『上げ膳据え膳で美味しいものをゆっくりいただきたい』とのことでしたので、お茶会がふさわしいかと考えたのです」。風炉で使用する灰は三カ月前からつくり、茶菓子のまんじゅうも特製。こ



▲初めてのお茶会。同じ時間を共有するボランティアにも新たな発見がある

のほか、料理や部屋の掃除をボランティアが手分けして受け持つなど、さまざまな人たちが、この日のために膨大な時間をかけています。

他のイベントとしては、一般向けの「なら燈花会」より2週間早い「早咲きの会」に参加させてもらったり、観光客もまだいない早朝の境内を鹿と散歩を楽しんだりしました。極めつけは、大仏殿の見学です。東大寺の配慮により、一般の人が仰ぎ見る須弥壇まで登らせてもらい、国宝の大仏様に直接ふれることができました。

華厳寮での“特別な日”を経験して、協力した重度心身障害の男性の両親は「魂が満たされるような不思議な体験でした。そして自分が倒れても息子がやっつけられる環境があると思えば安心しました」と語り、また、障害当事者の男性は、この時以来、すっかり“仏像マニア”になって、何度も大仏を観にこられているそうです。

「もう一度行きたいと思えるようなところであってこそ、親も子も安心して身を委ねられると思います。それは、時間の長さや回数には関係ありません。年に1回でもいいのです」と富和さん。

「患者」や「障害者」ではなく 共同参加者・協力者として

親子レスパイト・ケアでは、当事者とその家族は、ケアされる人ではなく、共同参加者、共同研究者の役割を担います。また、当事者と

家族と一緒に豊かな時間を過ごすだけでなく、その豊かさを同じ参加者である、研究者や関係者、ボランティアが共有できる場、縁を結ぶ場を目指しています。

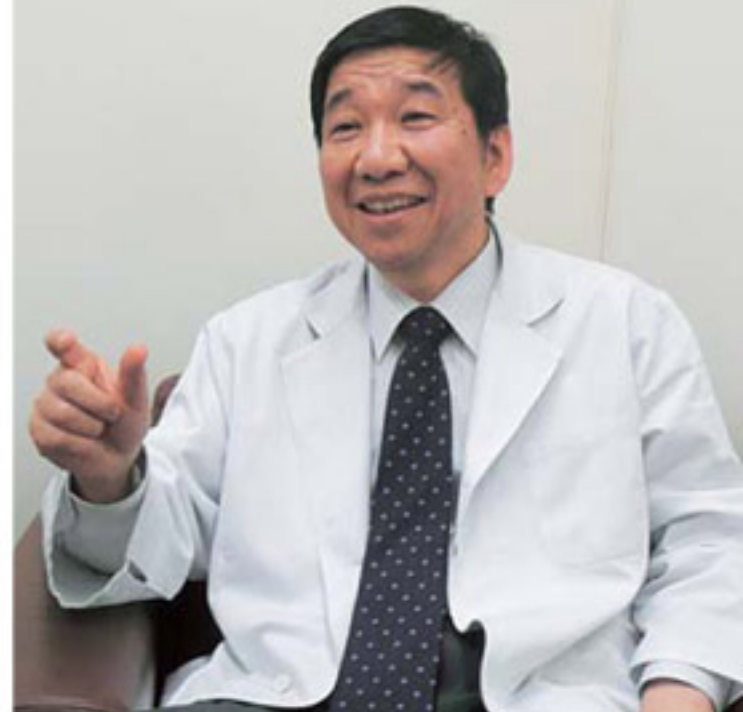
宿泊体験は、協力したボランティアにとっても特別で豊かな時間だったようです。

「一般の人々ならば、10年でさえあつという間に過ぎます。しかし『あと1年は、生きたい』と切に願っている人の1年は非常に濃密なもの、そういう人たちとの出会いによって、1年という時間の貴重さに気がつくことができます。このように、死への恐怖や将来の不安を抱え、ギリギリのところまで懸命に生きている人たちにしかみえないものは、私たちに新たな気づきを促し、社会に新たな価値を生み出していきます。つまり、彼らは社会の中でプラスの存在になりうるのです」と富和さん。

今後は、気軽に立ち寄れるギャラリー兼サロンをつくり、難病や重い障害のある人たちの社会的価値を伝えたり、レスパイト・ケアのあり方について意見交換したり、障害者、難病家族支援のためのボランティア研修を企画したりしながら、レスパイトハウスの開設を目指すそうです。

国の制度でできない、 不平等で、個別性を 大切にしたい活動を続けたい

「人間は一人ひとり違います。平等に生ま



▲東大寺福祉療育病院の副院長・富和清隆さん
れることはありません。また、個々の価値観や死生観、家族との関係も異なります。したがって、平等性を重んじる国の制度だけでは、すべての人を救うことはできないのです。しかし、こうしたバリアだらけの社会であっても、いろんな立場の人間が関わることでそれぞれが何かを得、深め広げていけば、バリアを埋めることにつながるのではないのでしょうか。私たちは、国の制度ではできない、縁を大事にした、不平等で、個別性を大切にしたい活動をしていきたいですね」と富和さんは話します。

医療や福祉関係の専門職においても、重い障害や難病のある人と向きあわなければならないとき、どのような接しかたをすればいいか悩むことも多いでしょう。制度に定められた基本的な役割を果たすことはもちろんですが「親子レスパイト・ケア」の取り組みが示唆する、家族を含む全人的なケアや「個別性」の考え方を通して、今一度、日常の業務を見直すことも大切です。

※富和先生の講演会を開催します。詳しくは本誌5ページ(講座案内番号②)をご覧ください。



▲豊かな自然、1300年の歴史に見守られた中で特別な朝の散歩



▲世界遺産を間近にして感動した男性は「仏像ファン」になった



写真をご提供いただいた、ご家族・関係者の皆様に感謝申し上げます。

① 社会福祉講演会(第2回) 過渡期を迎える刑余者支援における課題と展望 ～みんなの刑余者支援を目指して～

刑務所などの矯正施設を退所した人の中には、何らかの支援を必要とする人も多く、求められる支援内容は福祉だけでなく、医療、就労、あるいは日常生活へのよりよい生活など、多岐にわたります。大阪で刑余者支援を展開する「よりよいネットおおさか」をはじめ、「地域生活定着支援センター」の取り組みで分かりはじめた課題から、刑余者支援について、みんなで考えていきます。

- 日時 6月30日(木)午後2時～4時
- 定員 150人(先着順)
- 場所 大阪市社会福祉研修・情報センター大会議室(5階)
- 講師 よりよいネットおおさか相談員 益子千枝、田岡秀朋、平川隆啓
- 受講料 無料
- 申込締切 6月28日(火)※但し、定員になり次第締め切ります。

② 社会福祉講演会(第3回) 親子レスパイト ～難病や障害をもつ子どもたちとその家族への支援を考える～

レスパイトとは、「介護者の休息」を意味し、親が元気になれば、子どもも元気になります。在宅医療を必要とする子どもが増える中、その必要性は高まるばかりです。難病や障害の子どもとその家族がともに休息し、生きる喜びを一緒に発見することを目指す「親子レスパイト」の取り組みについて、お話を伺います。

- 日時 7月14日(木)午後2時～4時
- 定員 150人(先着順)
- 場所 大阪市社会福祉研修・情報センター大会議室(5階)
- 講師 東大寺福祉療育病院 副院長 富和清隆
- 受講料 無料
- 申込締切 7月12日(火)※但し、定員になり次第締め切ります。

③ 社会福祉史の市民講座(第2回) マスメディアから見る社会福祉事業 ～毎日新聞大阪社会事業団の活動から見る 新聞社会事業の役割～

今年で設立100周年を迎える毎日新聞大阪社会事業団の活動を振り返りながら、新聞社が行ってきた社会事業の役割や、福祉課題の解決にどのようにマスメディアと連携していけるのか考えます。

- 日時 6月18日(土)午後2時～4時
- 定員 50人(先着順)
- 場所 大阪市社会福祉研修・情報センター会議室2(5階)
- 講師 公益財団法人毎日新聞大阪社会事業団 事務局長 佐和 宏士
- 受講料 無料
- 申込締切 6月8日(水)※但し、定員になり次第締め切ります

④ 社会福祉施設職員のための 「地域との協働を実践する講座」

社会福祉職員として、地域との協働を実践するためにどのような視点が必要か、またその実践的手法について学び、地域福祉を推進する人材の育成を図ります。

- 日時 7月16日、8月6日、9月3日、1月28日、2月18日(全5回)の各土曜日いずれも午前10時～午後5時
- 対象 大阪市管轄の社会福祉施設に勤務する職員
- 定員 12人程度(申込み多数の場合は、選考のうえ受講者を決定します)
- 場所 大阪市社会福祉研修・情報センター講座室1(5階)
- 講師 大阪教育大学 准教授 新崎 国広
- 受講料 10,000円
- 申込締切 6月10日(金)必着
- その他 受講の申し込みに関する条件があります。詳しくはホームページ等で確認ください

⑤ スーパーバイザー養成講座

社会福祉実践の質的向上及び現場職員の資質向上をめざして、福祉の現場でスーパービジョンを実践できる人材を養成します。

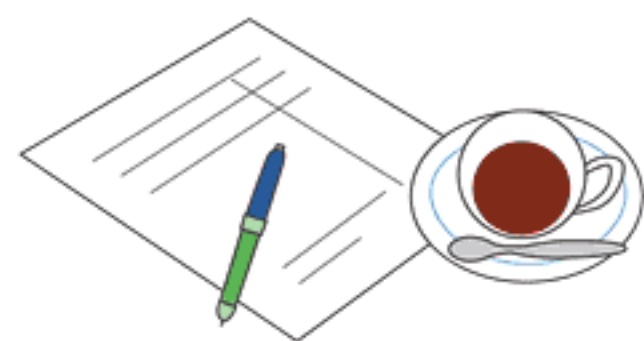
- 日時 7月27日(水)、9月22日(木)、11月17日(木)、1月26日(木)(全4回)いずれも午前9時30分～午後5時
- 対象 大阪市管轄の社会福祉施設に勤務し、スーパーバイザーの役割を果たす立場にある職員
- 定員 15人(選考のうえ受講者を決定します)
- 場所 大阪市社会福祉研修・情報センター講座室1(5階)
- 講師 桃山学院大学 非常勤講師 塩田 祥子
- 受講料 8,000円
- 申込締切 6月15日(水)必着
- その他 受講の申し込みに関する条件があります。詳しくはホームページ等で確認ください

①～⑤の申し込み・問合せ

大阪市社会福祉研修・情報センター 企画研修課
〒557-0024 大阪市西成区出城2-5-20
☎06-4392-8201 FAX 06-4392-8272

URL <http://www.wel-osaka.jp>

- 申込方法 ①講座名 ②名前(ふりがな) ③住所 ④電話・FAX ⑤所属 ⑥職種や活動内容(⑤⑥はある人のみ)を記入して、ファックス又はホームページから申し込みください。車いす利用の人、手話通訳、拡大文字資料などが必要な人は、申込時にその旨を記入してください。なお、社会福祉講演会(第2回、第3)は定員を超えて、参加できない場合のみご連絡いたします



大阪市福祉人材養成連絡協議会のホームページ

「ウェルふるネット」をご利用ください

ウェルふるネット 検索 <http://www.welful.net/>

大阪市内の社会福祉に関する研修や調査研究等の情報を掲載しています。

- その1** 研修情報のキーワード選択、福祉分野別選択が可能になりました。
- その2** 報告書・資料のページを新設しました。社会福祉に関する様々な報告書や資料を紹介いたします。業務や研究等にお役立てください。
- その3** 携帯電話への配信も可能になりました。簡単に、お気軽に研修情報を取得できます。新メールマガジンの申し込みを受け付けています。

〈メールマガジン登録方法〉

※パソコンへの配信希望者は、ホームページ上の申し込みフォームから申し込んでください。

※携帯電話への配信希望者は次の順番でお申し込みください。

- ①携帯電話の受信制限をかけている方は、メールマガジンの配信元メールアドレス「jinzai@shakyo-osaka.jp」を受信できるように設定操作してください。
- ②右のQRコードを読み取り、空メールを送信してください。
- ③登録完了メールが届きます。

※購読料は無料です。通信費は各自の負担となります。



「研究論文」及び「実践報告」の募集について

年刊研究誌「大阪市社会福祉研究」では、大阪市内で社会福祉の実践を行っている団体、グループ及び個人が自発的に研究活動を行い、その成果をまとめた「研究論文」及び「実践報告」を募集しています。

下記の要領により期日までにご応募ください。

《募集範囲》

- ①大阪市社会事業施設協議会に加盟する各施設の職員
 - ②大阪市社会福祉協議会及び各区社会福祉協議会の職員
 - ③大阪市健康福祉局・こども青少年局及び各区保健福祉センターの職員
 - ④その他大阪市内で社会福祉の実践を行っているグループ、個人などで大阪市社会福祉研修・情報センター所長が認める者
- ※いずれも、個人による研究のほか、グループによる共同研究、共同執筆によるものも可とします。

《原稿内容》

- ①テーマは「社会福祉」の範囲とします。
- ②研究論文、研究ノート、実践報告等、福祉の実践のうえで生起する諸問題について、その解決のための示唆や方向づけを与えるものとします。
- ③原稿は、未公開(未発表)のものに限ります。

《原稿枚数》

参考文献・図表等も含め、440字詰め40枚以内(原稿用紙、またはパソコンで作成された原稿)。

《応募要領》

所定の応募用紙により、6月30日(木)までに大阪市社会福祉研修・情報センターへ論文テーマ等ご連絡ください。掲載候補となったものについて、あらためて「執筆依頼」をお送りします。

原稿の締め切りは9月30日(金)とし、提出論文のなかから掲載論文を選定します。

《その他》

「大阪市社会福祉研究」に掲載された論文及び実践報告について、次のような観点から審査し、優秀と認められた場合に、同心会研究奨励賞、研究努力賞、会長賞が授与されます。なお、大学教員その他専門家との共同執筆による論文等は、選考の対象外となります。

- 審査項目
- (1) 継承性
 - (2) 独自性(重点評価項目)
 - (3) 波及性(重点評価項目)
 - (4) 客観性
 - (5) 協同性
 - (6) 構成員

募集・執筆にかかる詳細については、下記までお問い合わせください。

社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会

大阪市社会福祉研修・情報センター 企画研修課

〒557-0024 大阪市西成区出城2-5-20 ☎(06)4392-8201 FAX(06)4392-8272

「大阪市社会福祉研究」同心会社会福祉研究の研究奨励賞を授与

同心会(会長 右田紀久恵:大阪市社会福祉研修・情報センター所長)では、大阪市内で社会福祉の実践を行っている団体、グループ及び個人が自発的に研究活動を行い、その成果をまとめた「研究論文」及び「実践報告」の中から、特にその内容が優秀と認められたものに対して、4月25日(月)、当センターにおいて「研究奨励賞」を授与しました。

【受賞論文】

● 過渡期を迎える刑余者支援の課題と展望

よりそいネットおおさか相談員 益子 千枝さん
 田岡 秀朋さん
 平川 隆啓さん



同心会研究奨励賞の受賞を記念して講演会を開催します。詳しくは5ページ(講座案内番号①)をご覧ください



家庭養護促進協会の はじまりと発展②

本稿は三話完結の第二話です。

昭和36年に発足した「家庭養護促進協会」は、家庭養護寮の開拓、里親を増やす運動を推進していきます。しかし「家庭養護寮制度」はそれほど大きく進展しませんでした。原因の1つは、住宅問題です。一挙に3～5人の子どもを引き受けられる広い家はそう多くはありません。「家庭養護寮」を開拓する一方で、里親を増やさなければなりません。3人目の里子が委託されたところで「家庭養護寮」として認可し、支援していく仕組みを考えました。

では、どのように里親を開拓していくことができるのかが協会の課題でした。まず「ぼくにもほしいパパとママ」というキャッチフレーズで協会のポスターをつくりました。いいコピーだと思います。それから1960年代は、民間放送が誕生したという時代背景もあり、ラジオやテレビのスポットで里親を求めました。しかし、最も反響が大きかったのは、神戸新聞の三行広告でした。

里親募集のために、どのような情報を提供するのが効果的か。理事会では、これについて3つの原則を導き出します。まず「情報は具体的でなければならない」。漠然と「里親になって下さい」ではなく、最初から具体的なケースを出していきます。具体的であれば、読者はいろんなことを想像することができます。また、具体的な情報は「3歳のこの女の子を1年間お世話させていただくのだ」と里親になったときの状況を直接的に理解することもできます。2つ目は「情報は継続されねばならない」。記事を1～2回見ただけで決断するのは難しい。しかし、継続して機会が与えられれば「今週も載ってる、かわいい子やな。うちにおってもええんとちがう?」と読者の気持ちに変化していきだろろうという考えです。3つめは「情報は感動的でなければならない」。感動すれば、他の人に語り上げられる効果があるというわけです。

この3つの原則論を備えた運動のあり方として、マスコミが協力することになりました。まず、神戸新聞の学芸部(現、生活部)で里親募集の「あなたの愛の手を」というコラムが誕生しました。昭和37年の6月から毎週1人ずつ、神戸市の児童相談所から協会へ「里親を必要とする子どもの里親を捜してください」という形で依頼されます。そして、神戸新聞の記者と一緒に施設を訪れ、子どもたち取材します。

掲載されると、すさまじい反響が得られました。子ども1人あたり、10人から15人ぐらいの申し込みがありました。1番目の子は「父 事故死、母 就労、養育期間不定」で申込者19人。2番目の子は「父母行方不明、姉知人宅、IQが85と104」とIQまで載せていて、申込者13人という具合です。一定期間子どもを預かり養育するのではなく、養子縁組を前提として家庭委託されるケースもありました。

1年目に掲載された子どもは約40数人。このうち8割の子どもたちは里親へ委託。残り2割の子どもたちも、知人、あるいは行方不明だった実親たちが現れ、最終的には掲載された子ども全員が家庭に引き取られました。

この成果に驚き、大阪でも昭和39年より、毎日新聞とともに「愛の手運動」をスタートさせました。大阪では、大阪市、大阪府とタイアップし、大阪市が半分、大阪府が半分、年間50人を掲載します。大阪の申込件数は、神戸よりさらに多く、平均すると一人の子どもにつき、20～30件ぐらいです。一番多い時には、1人の子どもに150件の問い合わせがあったと記憶しています。3歳のかわいい女の子で、両親が交通事故で死亡したという事情でした。この頃、養子縁組の子どもには、約50～60人の申し込みがありましたが、子どもを一定期間養育し実親に返す「養育里親」という形が主流でした。



協会の事務局長であった小笠原氏が退職し、2代目に就任した伊藤友宣氏は、大阪大学の学生時代から非行少年の指導に当たり、小笠原氏と同様、新婚ほやほやの家庭に非行児を5人引き取り「家庭養護寮」の認定を受けました。家庭養護寮の実践は、高年令児にとっては非常にむずかしいことだと思っています。伊藤氏の家でも、子どもが1人去り、2人去り、最後に残った子どもが伊藤氏の家を出る時、伊藤氏にこう言いました。「僕たち、十何歳になってから、どうのこうのと言われても、そんな簡単に変わられへんねや」と。これを聞いて伊藤氏は、小さい頃より、里親にしっかりと育ててもらえるようにしなければならぬと思ったのです。

昭和39年から始まった当初の里親申込者の大半は、当時、戦争を経験した40代後半から50代の人たちが中心でした。戦争で家族や友人を亡くした経験をしたからこそ、生きのびることのできた自分の命を社会のために役立てなければいけないと感じていたのでしょう。しかし、特別に財産も学歴も社会的地位もない市井の人たちにとって、社会に役立つことができるのだろうかと考えていた時、この運動が始まったのです。「子どもの世話なら喜んでさせていただく」という気持ちで養育里親に申し込んでくれたのです。そして彼等は「産めよ増やせよ」という時代を生きて子守した経験から、子育てを苦勞と思っていませんでした。それに日本の良き子育て文化を引き継いでいる人たちでした。この時期に養育里親が増えた理由には、この時代ならではの社会的背景があったと思います。

※この稿は大阪市社会福祉研修・情報センターで開催された「社会福祉史の市民講座」の講演(講師:岩崎美枝子 社団法人家庭養護促進協会)の聴き取り(言葉については歴史的事実として当時の表現をそのまま使用しています)から抜粋したものです。

今月号の特集について
もっと詳しく知りたい方は…

「長期療養を支える家族ケア」

◎渡辺 裕子 著 医学書院 2006年
家族ケアの場面で、言葉はどこまで力を持ち得るのか。言葉が力をもつには何が必要か。10の事例から長期療養を支える家族ケアのツボとコツを解き明かしていく。



「難病の子どもを支える人たち」

◎難病のこども支援全国ネットワーク 編 大月書店 2001年
子どもの難病は500種類をこえ、20万人以上の子どもたちが病気と闘っている。彼らを支える、子どものための病院、地域の相談センター、病院の中の学級、院内ボランティア、難病ネットワークなどの役割を詳しく紹介



- 大阪市社会福祉研修・情報センター2階の図書・資料閲覧室では、福祉に関する図書、視聴覚資料（ビデオ、DVD等）、雑誌等を多彩に揃えています。
- 貸出は図書5冊、視聴覚資料5本、期間はそれぞれ2週間です。
- ホームページから蔵書検索やDVDなどのリストがダウンロードできます。

<http://www.wel-osaka.jp/>
☎06-4392-8233

（開設時間：月～土曜日・午前9時30分～午後4時45分、受付は午後4時30分まで。図書・資料閲覧室の開館時間外は、当センターの開館時間内であれば1階事務室で返却できます。）

図書紹介

「デイサービス生活相談員 業務必携」

◎大田区通所介護事業者連絡会 編 日総研出版 2011年
生活相談員に求められる役割、経営的側面での役割、業務手順などをわかりやすく解説。連携・調整業務の事例も収録。



「CD付き 高齢者のための楽しい音楽レクリエーション」

◎国立音楽院 監修 ナツメ 2011年
介護の現場で注目されている音楽を使ったレクリエーションを、「声を出す」「手を使う」「リズムに乗る」など5つのジャンルに分けて紹介。



「施設職員のための介護記録の書き方」

◎梅沢 佳裕 著 雲母書房 2008年
記録の準備と心構えから、観察の視点と情報収集、記録としての文章の書き方、保存方法、施設サービスと居宅サービスの記録まで、介護記録の書き方を解説。



DVD紹介

「私の中のあなた」

◎ハビネット 110分 2010年
白血病の姉ケイトのドナーになるため、遺伝子操作によって生まれた妹アナが、ケイトへの臓器提供を拒んで両親を提訴する姿を通し、家族のありかたや命の尊厳を問いかける作品。



「嚥下困難介護マニュアル」

◎丸善 30分 2009年
嚥下の仕組み、嚥下障害の見極め方、食前体操や口腔ケア・アイスマッサージの方法、さらには食事介護の実際に至るまでをCGや実写を織り混ぜ詳しく解説。



「福祉サービスのきずなをつくるコミュニケーション」

◎ジャパン通信情報センター 19分 2007年
話し方、聞き方のコツなど、対話によるコミュニケーションについてと文書作成の基本や、報告、連絡、相談の仕方など、文書によるコミュニケーションについてわかりやすく説明。



図書

- 「介護現場でのアルコール関連問題Q&A」 筒井書房 2009年
- 「3ヵ月ひとり立ち!新人ケアスタッフ教育マニュアル」 日総研出版 2011年
- 「認知症ファミリーブック」 日本評論社 2010年

DVD

- 「ハリートント」 20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン 2009年
- 「ひらく かける つなぐ」 メディアパーク 2010年

6月は食育月間! 毎月19日は食育の日です。

野菜料理は1日5皿(野菜350g)が目標です。平成21年国民健康・栄養調査結果では成人の約70%が5皿分(350g)に足りていません。

作ろう!
食べよう!
野菜料理

- ★毎食野菜を食べる習慣をつける
- ★冷凍食品や缶詰も上手に利用する
- ★加熱した野菜はカサが減ってたくさん食べられる
- ★外食のときは野菜の多いメニューを選ぶ



野菜2皿分(約70g)の料理

▶かぼちゃサラダ(2人分)

- かぼちゃ 100g ●レモン汁 大さじ1
- きゅうり 1/4本 ●ハム 1枚
- マヨネーズ 大さじ1強 ●塩・こしょう 少々

- 〈作り方〉
- ①かぼちゃ→皮つきのまま角切りにしてゆで、レモン汁をかける。
ハム→角切りにする。
きゅうり→薄切りにし塩をふる。
 - ②①をあわせてマヨネーズ、塩・こしょうで味をつける。

野菜2皿分(約140g)の料理

▶青菜のおろし煮(2人分)

- 厚揚げ 50g ●こんにゃく 1/6枚
 - こまつな1/2束 ●にんじん 中1cm
 - だいこん 中3cm
- A(だし汁 1/2カップ 砂糖 小さじ1/2
しょうゆ 大さじ3/4 みりん 小さじ1)

- 〈作り方〉
- ①厚揚げ→湯通しをし、1~2cm幅に切る。
こんにゃく→短冊切りにし、さっとゆでる。
にんじん→短冊切りにする。
こまつな→4cm長さに切る。
だいこん→すりおろして軽く水気を切る。
 - ②鍋にAを入れ火にかけ、だいこんおろし以外の材料を軟らかくなるまで煮る。だいこんおろしを入れてひと煮立ちしたら火を止める。

誤嚥性肺炎の防止 体の入り口“口腔”を清潔に

がん・心疾患・脳血管疾患が、我が国での三大死亡原因とされています。しかしながら、高齢者の場合忘れてはならないもう一つの死亡原因があります。それが、肺炎・気管支炎です。

食物を取り込む口腔内には大腸と同レベルの細菌が生息している場合があります。高齢になると嚥下や咳反射が弱まり、唾液と共に口腔内の細菌が気管内に流入しやすくなり、これが原因で肺炎を引き起こすことがあります。これが“誤嚥性肺炎”と呼ばれるものです。

阪神大震災のときでも、避難所などで震災関連死された方のうち、最も多かったのが肺炎による死亡でした(約24%)。水不足の避難所生活で十分な歯磨きができないことから、細菌が肺に入って誤嚥性肺炎にかかる高齢者が多かったとみられています。逆に、入院患者などの調査研究から、口腔清掃をしっかりすると肺炎が減少することがわかってきています。

高齢になれば、今まで以上に口の中を清潔にしておくことが重要になります。介護を必要とする人の場合には、体の入り口・出口を清潔にしてあげることが大切です。

お問い合わせは…大阪市健康福祉局健康推進部健康づくり課 ☎06-6208-9961

今月の
自助具

指サック式鉛筆ホルダー
(コルク粘土を使用した)

資料提供:
HUMAN universal design office
岡田 英志さん

主な適応疾患・対象者

- 手の筋力低下や変形のある方。
- 脳性マヒで緊張や付随動作のある方。

機能・特徴

- 鉛筆を握れなくても、指先だけで文字や絵が書ける。
- 手を突然開いてしまっても、鉛筆を落とす事がない。
- 使用者の指に合わせてコルク粘土で作るので、書くときに安定したホルダーとなる。
- 工具を使用しなくても製作できる。

使い方

- コルク粘土で造形したホルダーに鉛筆を差し込み、指を差し込み、指先を動かして文字や絵を書く。



自助具の展示と相談コーナーを設けています。お気軽にご利用ください。
説明や相談は以下の日程で行っています。

- 説明・相談の日時 自助具の説明・相談 毎週木曜日 午前10時~午後4時
- 相談専用電話(毎週木曜日のみ) ☎06-4392-8235

健康生活
応援グッズ

電動ベッドで自立支援と介護を楽に!

体とのフィッティングの
良さで好評



◎プラッツ ミオレット

利用者に合わせ脚部のフィッティングが可能。しかも後方にスライドさせながら、バックオフ機能により、背上げ時にお尻のズレや腹部・背中の圧迫感を軽減。介助負担も軽減できる介護保険レンタル対応在宅介護用ベッド。

介助する人も自立もラクラク



◎KOIZUMI NEWウェルホーム

スタイリッシュなデザインで、簡易組立設計。硬さが選べる抗菌加工マットレスは工業用洗濯が可能。床面からの高さが4段階に設定でき、背部が上がった状態時に脚部がフラットなのでベッドからの移動も快適。

ベッドでの重大事故を未然に防ぐ



◎モルテン インプレス

すき間による挟み込みやずり落ち、衣服のひっかかりやリモコンの誤操作等の事故を防ぐ安全対策と、姿勢の崩れを防ぎ優しく体を起こす機能や、立ち上がり動作をサポートする機能などにより安心感がアップ。

問合せ

社団法人関西シルバーサービス協会 事務局
〒542-0065 大阪府中央区中寺1-1-54
大阪社会福祉指導センター2階

☎06-6762-7895 FAX 06-6762-7894
http://www.kan-sil.or.jp

高齢者や認知症、知的・精神障害のある方などの福祉や生活支援、権利擁護に関するさまざまな相談に応じます。

総合相談コーナーからのお知らせ

相談直通
ダイヤル

☎06-4392-8740

※(個人情報)相談でおうかがいした個人情報については、相談目的以外に利用することはありません。また、秘密は守られます。

開設日 月曜日～土曜日 午前9時～午後5時

総合相談コーナーは、日曜日、祝日(土曜日と重なる場合は除く)、年末年始は休みです。

専門相談(要予約)

総合相談・高齢者相談をお受けする中で、必要に応じて専門相談を実施しています。

※専門相談は、原則として来所相談で、事前に電話予約が必要です。

法律相談 毎週金曜日午後・第1木曜日午後
(弁護士による遺産相続、金銭貸借、損害賠償など法律に関する相談)

権利擁護相談 毎週水・木曜日午後(第1木曜日はのぞく)
(弁護士と社会福祉士による認知症、知的障害、精神障害などにより判断能力が不十分な方や関係者からの、虐待や財産侵害、財産管理や成年後見制度などの相談)

認知症医療相談 月7回 (専門医による認知症の方や精神疾患の方の医療に関する相談)

そのほか、

税金相談 **保険・年金相談** **リハビリ相談** **住宅改造相談** もあります。

高齢者やその家族の方から生活全般にわたる相談や、情報提供などに応じます。

高齢者相談

☎06-4392-8181

相談日時 電話相談のみ
24時間365日休まず受付

大阪市成年後見支援センターからのお知らせ

成年後見に関する相談

■相談員による相談(電話・来所).....月曜日～土曜日 午前9時～午後5時
■専門職(弁護士・司法書士・社会福祉士)による相談.....原則として週3回・予約制(電話・来所・必要に応じて訪問)

直通電話

☎06-4392-8282 FAX06-4392-8900

日曜日、祝日(土曜日と重なる場合は除く)、年末年始は休みです。



福祉職員のメンタルヘルス相談

疲れやすい、やる気がでない、眠れない、対人関係がうまくいかない...など福祉の仕事に携わる方のストレスから生じるさまざまな問題の相談に応じます。

◇相談方法 電話または面談(まずは、お電話ください)。必要に応じて来所によるカウンセリングも行います。

◇相談員 臨床心理士 ※秘密は厳守します。初期相談は無料です。

◆実施:大阪市社会福祉協議会

(大阪市社会福祉研修・情報センター)

相談直通☎(06)4392-8639 (開設日時)毎週土曜日 午前9時30分～午後4時

福祉用具・自助具展示相談コーナー

1階に福祉用具と自助具の相談コーナーを設けています。お気軽にご利用ください。

福祉用具(心身の機能が低下し、日常生活を営むのに支障がある要介護者等の日常生活の自立を助けるための用具)を展示しています。

自助具(身体が不自由な人が日常生活動作をより便利に、より容易にできるように工夫された道具であり、福祉用具の中で最も身近な自立を助ける道具)展示コーナーでは日常生活の数々の場面で必要な手作りの自助具とその紹介パネルや一般に市販されている物も合わせて展示しています。

●福祉用具の説明・相談日

月～金曜日 午前10時～午後1時

福祉用具の選び方、使い方その他、福祉用具に関するどんなことでもご相談ください。予約は不要ですが、多人数への説明等については、事前にご連絡ください。

●担当:関西シルバーサービス協会
☎06-4392-8235

●自助具の説明・相談日

木曜日 午前10時～午後4時(休憩時間あり)

経験豊富なボランティアグループのメンバーが相談に応じます。また一人ひとりの機能に合わせて作るオーダーメイド自助具の相談もできます。

●担当:ボランティアグループ大肢協「自助具の部屋」
☎06-4392-8235

パンフレット、カタログ、雑誌から会社案内等々

広告・デザイン・印刷のことなら

何でもご相談ください。



たとえば団体や催し物をアピールするためのパンフレットやフライヤー。作りたいものがあったとしても、それがなかなかカタチにならず困ったことはありませんか?そんなときは、アド・エモンにご連絡ください。当社が企画の段階から納品にいたるまで、各専門スタッフが的確にサポートし、あなたとアイデアをつなぐトビラになります。



TOTAL CREATION
AD.EMON
株式会社 アド・エモン

〒530-0045 大阪市北区天神西町8-19 法研ビル5F

TEL:(06)6362-1511(代) FAX:(06)6362-1510 E-mail:info@ad-emon.com

http://www.ad-emon.com

(広告)

広告募集中